高知

014

二〇二五年度　入学試験問題（前期日程）

小　論　文

試験時間　百二十分

地域協働学部（地域協働学科）

問題冊子……一～六ページ

解答用紙……五枚

下書用紙……三枚

配　点……表示のとおり

注　意　事　項

一、試験開始の合図まで、この問題冊子を開かないこと。

二、試験中に問題冊子・解答用紙の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び下書用紙の不備等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

三、各解答用紙に受験番号を記入すること。
　なお、解答用紙には、必要事項以外は記入しないこと。

四、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。

五、解答用紙の各ページは、切り離さないこと。

六、配付された解答用紙は、持ち帰らないこと。

七、試験終了後、問題冊子、下書用紙は持ち帰ること。

八、試験終了後、指示があるまでは退室しないこと。

問　以下の課題文を読んで、設問に答えなさい。（二〇〇点）

まず、この本で「これだけは覚えておいてほしい」ことを最初に述べておこう。それは社会的処方を行っていくうえで一番大切にしたい「3つの理念」だ。今回の本の内容は全て、この理念を様々な角度から言い直したものだ、と言っても過言ではない。それくらい、大切にしたい理念なのだ。

その3つとは、

- **人間中心性（person-centeredness）**
- **エンパワメント（empowerment）**
- **共創（co-production）**

である。では、ひとつずつどういった意味なのか、について解説していこう。

まず簡単に、前著『社会的処方』から、社会的処方とは何だったのか、についておさらいしておこう。

社会的処方とは、薬を処方することで患者さんの問題を解決するのではなく、「地域とのつながり」を処方することで問題を解決するというもの。

例えば、高齢で家に引きこもっている方が、「眠れない」ということを主訴に医者にかかったとする。普通の医者なら、睡眠薬を処方して診察を終えるかもしれない。でも、もしその医者がよくよくその方の生活習慣を聞き取って、不眠の原因が日中の引きこもりによる活動不足だと考えたら。そして、その方のもともとの仕事が花屋だということまで聞き取ることができたら。その医師は、知り合いが参加している、地域美化や花壇の整備に取り組む市民グループとつなげてみるかもしれない。「なんで俺がボランティアなんかしないとならないんだ」と、最初は文句を言うかもしれないけど「花の扱いに長けているあなたの力が必要なんです」と頼んでみたら、「先生がそこまで言うならやってやらないこともないけど」とまんざらでもない。そして、その方はボランティアを契機に積極的に外出するようになり、体も気持ちも元気になっていく。薬なんかなくたって、夜はよく眠れるようになり、食事もおいしくなって体重も増えた。そして何より、地域で共に過ごす仲間と笑顔が増えた…。

そして、この事例では医師が中心となって患者さんを社会資源とつなげているが、実際の現場では医師がここまでの役割を果たせる例は多くはない。

それは看護師や薬剤師なども同様である。よって、社会的処方発祥の地であるイギリスでは社会的処方を実践するのは医師などの医療者ではなく、「リンクワーカー」と呼ばれる専門職が中心となっている。リンクワーカーは、孤立している個人やその支援者と面会し、本人の特性や興味関心などを聴取しながら、孤立の解決のために地域活動などとつなげていく役割を担っている。イギリスでは主に非医療者が担っており、地域によって「ヘルスコネクター」や「ケアナビゲーター」などと呼ばれることもある。イギリスでは２０１９年からリンクワーカーを養成するための予算を計上し、２０２３年の時点で約３５００人が登録されているとのことだが、今後はそれを２０３６年までに９０００人にまで増やす計画だという。なぜなら、現時点でもリンクワーカー１人が平均して２００～２５０人の住人をカバーしなければならず、社会的処方を必要とする人の待機が６週間待ちという状況だからだ。

また、専門職としてのリンクワーカーの他に、地域住民がボランティアとしてリンクワーカー的に活動する地域もある。

２０２３年に発表された新たな社会的処方の定義は、「医療以外の健康関連の社会的ニーズを持っている人がいた場合に、臨床現場や地域社会で活動する人がその方の課題を特定し、健康やウェルビーイング、そして地域とのつながりを向上させる目的で、その方を地域社会内の非臨床サポートやサービスに結び付けるための手段を共同で作っていくこと」とされており、以前のように医療者が中心となって社会的処方を行っていくという流れから、リンクワーカー的に活動する住民＝市民リンクワーカーが主体となって実践を行っていく方向へ変化してきている。僕は、「社会的処方を文化にする」と称して、この住民主体型の社会的処方モデルが、日本で進めていくうえでは好ましいと考え、その実践を行っていっている。

さて、この実践を行っていく中で市民リンクワーカーにとって重要なことは「好奇心と思いやりをもって、目の前の個人を見ていく」姿勢である。

具体例をあげよう。前著から引用した部分で取り上げた「眠れないと訴えた元花屋の孤立した高齢男性」をＡさんとする。このＡさんは花壇の整備をする市民グループとつなげたところ、うまくいった。それは良かった。では、次に「眠れないと訴えている孤立した高齢男性」のＢさんが目の前に現れたとしよう。そこであなたは「おっ、このＢさんは先日の社会的処方がとても良かったＡさんのパターンと全く一緒じゃないか。じゃあ、このＢさんも同じように花壇を整備する市民グループにご紹介しよう」と考えるだろうか？　そうはならないだろう。なぜなら、Ａさんは元花屋さんで花が大好きで、というバックグラウンドがあったからうまくいった。でもＢさんは年齢も、状況も、困っている内容まで全て一緒だったとしても、当然のことながらＡさんとは別の人生を歩んできた他人である。仮にＢさんに花壇整備の市民グループを紹介したとしても、

「花？　全く興味ないけど、どうして俺はこんなところに連れてこられたんだ？」

となって、Ｂさん自身にとっても、また市民グループにとっても「あの人やる気も無いのに何でこの集まりに来ているのかしらね」と、マイナスな面し

かない。

だから、社会的処方を実践する上では「人間中心性」、つまりその方がこれまでどんな人生を歩んできて、何に興味があって、そしてこれからどう生きていきたいと思っているのか、「好奇心と思いやりをもって」まずは聞けることが大切なのである。

では、Bさんに改めてよくよく話を聞いていくと、実は彼は50年来のジャズフリークであったのだが、「東京都内で行きつけだったバーに行けるほどの体力も気力も無いし、かといってこの近所には音楽が分かる連中もいやしないし。家で一人でレコードかけるくらいしかないんだよ」

という話だった。そこまで聞いたリンクワーカーは、

「いや、確かにこの駅の周辺には無いんですけどね、実は電車で2つ行ったところに、若いバンドを応援しているジャズ喫茶があるんですよ。それで、最後はお客さんからカードに感想を書いて渡したりもしているんですって。ちょっと一緒に、どのくらいのレベルなのか聞きにいってみませんか？」

と話していくと、「それは知らなかったなあ。今の若いやつらがどんな演奏するのか、ちょっと聞きにいって、ハッパかけてやるか」と、Bさんとリンクワーカーは夜の町に消えていったのだった。

エンパワメント（empowerment）とは、語源的には動詞化や強調の意味をもつ「em」を、能力や力の訳となるpowerにつけて名詞化した言葉である。本来は「能力を伸ばす、引き出す」といった意味合いになるが、１９５０年から１９６０年代の公民権運動や１９７０年代のフェミニズム運動など、社会を変える活動が盛んになるにつれてたびたび用いられる言葉となり、「誰もが本来備えている能力を、発揮できる社会を目指す思想」として使われるようになっていった歴史がある。社会的処方の文脈においては、その社会学的な意味を含みつつ、本来の語源に近い使われ方をされる場面が多いようだ。

例えば、ある団地に暮らす一人暮らしの高齢女性のCさんがいたとしよう。先ほどのAさんの場合は、「元花屋」というある意味「手に職」があったから、うまく社会資源につながることができたが、このCさんは「ずっと主婦をしてきただけだから、何の取りえもなくって…」とおっしゃっているという。

ではでは、ということでCさんの部屋にお邪魔したリンクワーカーは、Cさんにお茶を淹(い)れてもらいながら昔話などを伺っているうちに、ふとタンスの上に置かれている1枚の写真に目を止めた。

「Cさん、あの写真、小さいお子さんが映っていますね」

「ああ、あれね。娘たちが小さい時の写真なの」

「二人とも同じ服を着ているんですね」

「そうそう、あれは私が昔作ってあげたものだからね…」
そこまで聞いたリンクワーカーは、目を輝かせて身を乗り出した。
「えっ！あの服をCさんが作られたんですか？　すごいじゃないですか！」
「いやいや、あんなのは昔なら誰でも作ったものなのよ…」
「いや、それでもすごいですよ。実は、この団地に暮らしている若いお母さんたちって、ミシン持っていないとか使い方わからないとか、けっこう多いんですよ。でも、自分の子どもたちに幼稚園で使うエプロンとか、かわいい布地でちょっとしたワンピースとか、作ってみたい～ってよく話されているんですよね。Cさん、あなたあんなにきれいに服を作れるなら、ちょっと若いお母さん向けに『ミシン教室の先生』とかやってもらえませんか？」
一気にまくしたてるリンクワーカーに、Cさんは少したじろいで
「いやいや、私がそんな『先生』だなんて…」
と謙遜するが、そこでリンクワーカーが
「実は、2つ隣に住んでいるDさんって日本茶を淹(い)れる名人って知っていました？　ちょっとDさんにも協力してもらって、美味しい日本茶を飲みながらC先生のお話を聞く……みたいな感じだと、楽しいと思うんですよね」
と提案すると、今度はCさんも身を乗り出してきた。
「まあ、あの奥さんはそんな特技をお持ちなんですね。Dさんとご一緒に…それならちょっと面白そうかしら」
その後もリンクワーカーとCさんでいろいろと話をしていき、最終的には
「私ができることで、この団地の若い方々の助けになるのだったら…一肌脱いでみましょうかね」
ということで、「団地のミシン教室」が誕生したのだった。
このように、手に職があるとか、誰の目にもわかりやすい特技がある、といった方ではなくても、誰しもがこれまで生きてきた経験であったり、本人の興味・関心をもとにして社会とつながっていくことができる。問題は、そのことを「信じられるかどうか」というリンクワーカー側の心の中にある。すぐに結論を出さなくてもいい、引きこもりを解消するとかの「分かりやすい結果」に飛びつかなくてもいい。目の前にいる人を信じて、気長に、本人がもっているものを一緒に見つけていくプロセスを共に過ごすことが大事なのである。

共創とは、読んで字のごとく「一緒に作っていくこと」。これは社会的処方の論文の中でも「自らの社会的処方を（リンクワーカーと一緒に）自ら生み出していく」という文言で記載されている。

社会的処方について、全国で講演活動を行っていく中で何度も受けた質問がある。それは「うちみたいな田舎では、そんなに社会資源なんて無いから社会的処方なんて無理ですよ。都市だからできることじゃないですか？」というもの。僕がそういった質問を受けてまず心に浮かぶのは「それは、あなたがこの町にどんな社会資源があるのかご存知ないだけでは？」という疑問だが、それを直接言うとケンカになる。僕も大人なのでそこはぐっとこらえ、そこでこの「共創」の話をするのである。

そもそも、どんなに都会であっても「住民にとって適当な社会資源がすべてそろっている」なんて場所は存在しない。例えば、先ほど例に挙げたジャズ好きのBさん。あの場合はたまたま近隣にジャズ喫茶があったから良かったようなものの、仮にBさんの好みが別の音楽のジャンルだったら？「音楽」と一口に言っても、ポップス、クラシック、R&B、レゲエ、ロック…などメジャーなものの他にも山のように種類がある。それら一つ一つの興味関心に適合する社会資源がそろっている町なんて、存在するはずがない。では、適合する社会資源が無ければ、社会的処方はできないのか、となればそんなことはない。先ほど例に挙げた、ミシン教室の先生になったCさんの例のように、社会的処方は自ら生み出すことも可能なのである…というより、これを意識しなければ人を既存の社会資源に無理やり当てはめてしまうことで、むしろ害になる事例を生み出しかねないため、注意が必要である。

「アイデアとは既にあるものの新しい組み合わせ」とはジェームス・ヤングの名著『アイデアのつくり方』からの一節であるが、社会的処方とはまさに、「人と人とのつながりの新しい組み合わせ」なのだ。支援者だけがいても、新しい社会的処方は生まれない。そのときケアされる人がいて初めて、組み合わせが生まれる。

「あなたがいたからこそ、このつながりのアイディアが生まれたのだ」

あなたがどんな経験を持っていたか、どうやって生きてきたか。そこに「強み」も「特技」も必要ない。あなたがそこにいることそのものが、この社会的処方を生んだのである。

リンクワーカーは、この「3つの理念」を意識しながら社会的処方の受け手との面談と情報提供を行う。それは1回で終わることもあれば、電話面談を含む数回のセッションでフォローアップして、受け手がきちんと社会とつながっていっているかを確認していく。ただ、僕らが考える市民リンクワーカーの取り組みの場合、そこまで厳密なフォローは難しいかもしれない。一方で、市民リンクワーカーの強みは「同じ地域やコミュニティで一緒に生活をする住人」として、年単位で継続的にゆるく関わり続けられるという点だ。お互いが生活の動線上で時々顔を合わせて短い会話を続けられていくことは、専門

職リンクワーカーには無い強みがある。

改めてこの本では、全体を通じてこの「社会的処方の3つの理念」をどのように実践していくのか、どこにその考え方が生かされているのか、を意識して読み進めてもらいたい。最終的に全ての事例や細かい理論は忘れてしまったとしても、この3つの理念のことさえ覚えておいてくれれば、住民ひとりひとりが「市民リンクワーカー」として、社会的処方をまちの中で実践していくうえで大きな力になるだろう。

（出典　編著者 西智弘　著者 岩瀬翔・西上ありさ・守本陽一・稲庭彩和子・石井麗子・藤岡聡子・福島沙紀『みんなの社会的処方　人のつながりで元気になれる地域をつくる』〔学芸出版社、二〇二四年〕より引用。ただし、原文の論旨を損なわない範囲で一部省略・変更を加えた。）

設問一　課題文で述べられている「社会的処方モデル」について説明しなさい。

（1）「社会的処方モデル」とはどのようなものか、一〇〇字以内で説明しなさい。

（2）「住民主体型の社会的処方モデル」とはどのようなものか、一〇〇字以内で説明しなさい。

設問二　課題文で述べられている「3つの理念」について説明しなさい。

（1）「人間中心性」とはどのようなものか、一〇〇字以内で説明しなさい。

（2）「エンパワメント」とはどのようなものか、一〇〇字以内で説明しなさい。

（3）「共創」とはどのようなものか、一〇〇字以内で説明しなさい。

設問三　「市民リンクワーカー」に関する著者の考えをふまえた上で、社会的処方に市民が関わることから生ずるメリットおよび懸念される事柄について、あなたの考えを四〇〇字以内で述べなさい。